

翻刻 渡部寛一郎日記3 (明治三十九年)

渡部寛一郎文書研究会

(要木純一・竹永三男・板垣貴志・内田融・大國由美子・大原俊二・居石由樹子・小林啓治・小林奈緒子・杉谷直哉・原洋二・本井優太郎・森安章)

摘要

渡部寛一郎文書は、渡部寛一郎日記、剪淞吟社に結集する人々の漢詩と関連文書、若槻礼次郎ほかの渡部寛一郎宛書簡、私立中学校修道館など渡部寛一郎が関わった教育関係文書などで構成されている。中国文学・歴史学などの学際的研究によってこれらの諸文書を解説・分析し、近代日本の漢詩文学と政治文化の関連を山陰地域に即して実証的に追究することが本プロジェクトのめざすところである。今回は、渡部寛一郎日記第三冊(明治三十九年、メモの部分に四十年、四十二年の記事あり)の手帳を翻刻紹介する。渡部寛一郎が、主に教育関係で、東京・東北・松江で活動する様子が記されている。

キーワード：渡部寛一郎 近代 政治 教育 漢詩

【解説】

「渡部寛一郎日記」(以下「日記」と略。松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵「渡部寛一郎文書」)の中、今回翻刻する部分には、(A)一九〇六年(明治三九)三月一日～七月一日の在松中の記事、(B)九月一日～一〇月六日の名古屋・東京・仙台行きの記事が収められている。

この中、(A)には、松平直亮伯爵の病氣軽快を歡び、祝電や見舞

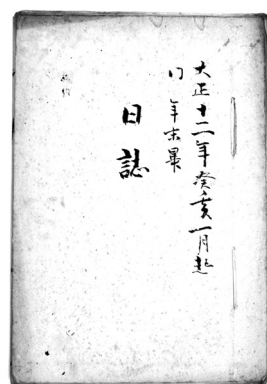
い品(蒲鉾一〇本)を送るなど(三月三日、五日、二二日)、同伯爵との親密な関係を示す記事が断続的に掲載されているほか、斐伊・三刀屋の両高等小学校の參觀(三月一〇日)、島根県私立教育会総会(五月二六日・二七日)等の記事が掲載されている。なお、「山陰新聞」によれば、渡部寛一郎は、五月二六日に島根県師範学校講堂で開催された島根県私立教育会総集会で、評議員に選出されていた(「山陰新聞」一九〇六年五月二八日)。

一方、(B)には、九月一五日に松江を出発し、境から日本郵船・熊本丸で敦賀に至り、名古屋経由で(同地で高等工業学校・県立工業学校・第一中学校・明倫中学校・博物館參觀)東京に出かけた後、さらに仙台まで足を伸ばした記事が掲載されている。この旅行で渡部寛一郎は、東京到着の翌二〇日に松平直亮伯爵を訪問し、二一日には松永武吉島根県知事を訪ねた後、文部省に向向いて「木邨浅井両氏二面会」している。『明治三十九年 職員録(甲)』(印刷局)によれば、文部省専門事務局の属に木村峰之助、図書審査官に浅井郁太郎がいる。木村峰之助は「渡部寛一郎日記」明治三十二年九月三〇日、明治三十二年七月一〇日にも登場する(渡部寛一郎文書研究会二〇一八、大國由美子二〇一八・二〇一九参照)。また、石川県士族で帝国大学・同大学院で地質学を専攻したという経歴をもつ浅井は、一八九二年から一八九六年まで島根県第一尋常中学校長を務めていたので(『松江北高等学校百年史』一九七六年、大國由美子二〇一八)、その縁から文部省での用務に際して頼りにしたものと思われる。

渡部寛一郎は、東京での用務の後、九月二五日(二七日、仙台に足を伸ばして松島を巡覧している。手帳のメモ書き用の部分には、松島を詠んだ漢詩等のメモが記されている。翌四十年には、鳥取東郷温泉に宿泊した際の漢詩、また、三年後の明治四十二年に松島を再訪した際の碑文等の写しも載っている。どのような経緯で三十九年の手帳に、後の年の記事や詩を載せたのかは不明だが、寛一郎の漢詩人としての一斑をうかがえるものとして、附録した。

*

今回翻刻した日記に関する解説は以上にとどめ、(C)で、「渡部寛一郎日記」の全体を紹介しておく。



【写真1】「大正十二年癸未年十一月廿一日」日記

原洋二氏所蔵の「渡部寛一郎文書」は、渡部寛一郎文書研究会によつて整理され、順次目録作成・撮影が進められているが、その第一函には渡部寛一郎の自筆日記二十一点が収められて

いる(表1)。このうち、十一点は手帳(市販九点、第一銀行製・榛原製各一点)、一〇点は野紙を紐綴じして表紙を付した縦帳(簿冊形式)のものである(【写真1】)。市販の手帳等に記した日記の主要記事は、島根県内(大原郡木次町ほか)、東京や朝鮮等への旅行記録であり、それぞれの旅行に携帯して、日々の行動・見聞を書き留めたものである。これに対して、野紙・紐綴じの簿冊体裁の日記は、日日の記事を順次書き綴つたもので、教育家、漢詩人、憲政会所属の政治家(克堂会長・県会議員)である渡部寛一郎の活動を精確に解明することができる第一級の史料である。

渡部寛一郎文書研究会は、引き続き、この「渡部寛一郎日記」の翻刻・公開を継続し、近代の漢詩文化と地方政治状況の研究のための史料を提供していく。

【参考文献】

大國由美子 二〇一八「渡部寛一郎日記2(明治三十一年部分)注釈」『山陰研究』11

大國由美子 二〇一九「渡部寛一郎日記2(明治三十二年部分)他注釈・人名索引」『山陰研究』12

【表1】「渡部寛一郎日記」目録 (松江市新羅賀町・原洋二氏所蔵「渡部寛一郎文書」第1函)

目録番号	表題	記事記載期間	備考(縦横サイズ)
1-1		1897年(明治30)2月2日～同年4月1日	縦書・市販自由記述手帳(74mm×112mm)
1-2		1898年(明治31)9月9日～同年10月8日 1899年(明治32)6月15日～同年7月16日	白紙。市販自由記述手帳(77mm×114mm)
1-3		1906年(明治39)3月1日～同年10月6日	第一銀行ポケット日記(140mm×90mm)
1-4		1916年(大正5年)6月2日～同年7月20日 同年10月19日～同年10月24日	縦書・市販自由記述手帳(127mm×76mm) 「京城見聞記」(朝鮮旅行)、木次旅行
1-5	大正六年十二月起 日誌	1917年(大正6)12月1日～1920年(大正9)1月1日	縦書罫紙・紐綴縦帳(238mm×173mm)
1-6	大正九年三月起同十年末ニ至ル 日誌	1920年(大正9)3月1日～1921年(大正10)12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(246mm×170mm)
1-7	大正十一年壬戌一月起同年未畢 日誌	1922年(大正11)1月1日～同年12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(242mm×167mm)
1-8	大正十二年癸亥一月起同年未畢 日誌	1923年(大正12)1月1日～同年12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(246mm×170mm)
1-9	大正十三年甲子一月起至十二月畢 日誌	1924年(大正13)1月1日～同年12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(248mm×172mm)
1-10	大正十四年乙丑一月起至十二月畢 日誌	1925年(大正14)1月1日～同年12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(250mm×173mm)
1-11	大正十五年丙寅一月起昭和三年戊辰十二月畢 日誌	1926年(大正15)1月1日～1928年(昭和3)12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(254mm×175mm)
1-12	昭和四年己巳一月起同十二月畢 日誌	1929年(昭和4)1月1日～1929年(昭和4)12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(250mm×174mm)
1-13	昭和五年庚午一月起同七年十二月畢 日記	1930年(昭和5)1月1日～1932年(昭和7)12月31日	縦書罫紙・紐綴縦帳(254mm×175mm)
1-14	昭和八年癸酉一月起 日記	1933年(昭和8)1月1日～1937年(昭和12)6月14日	縦書罫紙・紐綴縦帳(255mm×175mm)
1-15	NOTE BOOK 出遊日記	1929年(昭和4)4月10日～1931年(昭和6)1月10日	縦書罫紙・市販手帳(132mm×80mm)
1-16	備忘録	1931年(昭和6)1月11日～1936年(昭和11)10月7日	縦書罫紙・市販手帳(154mm×90mm)
1-17	(表紙欠)	1917年(大正6)3月19日～同年5月4日	横書罫紙・自由記述手帳(152mm×64mm) 日本橋・榛原(直次郎)製
1-18	大正十五年六月起(出遊日記)	1926年(大正15)6月4日～1929年(昭和4)3月10日	縦書罫紙・市販自由記述手帳(126mm×72mm)
1-19	(スケッチ・備忘録)	年月不詳 2日～11日/風景スケッチ9点	方眼紙・市販手帳(120mm×85mm)
1-20	NOTE BOOK(軍関係記事)	年月不詳 3日/1日～8日 九州旅行記事	方眼紙・市販手帳(100mm×155mm)
1-21	NOTE BOOK(住所録、スケッチ)	不詳	方眼紙・市販手帳(152mm×108mm)

渡部寛一郎文書研究会 二〇一八「渡部寛一郎日記2 (明治三十一年・三十二年)」『山陰研究』11

(竹永三男)

〔凡例〕

一、本号では、「渡部寛一郎関係文書」(松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵)から、渡部寛一郎日記第三冊を翻刻した。既製の日付入り手帳の各日付に、明治三十九年の記事を書き載せるが、未記入の部分も多い。さらに、自由記述メモ用の部分にも記載があり、殆どは三十九年のものと推定されるが、四十年、四十二年の後補もある。他に会計、住所録があり、これらも翻刻した。裏表紙裏の、意味不明の書きかけ等も翻刻している。

一、原本は、第一銀行製、臙脂色革表紙、縦長の日付入り手帳である。横約九・〇センチ、縦約一四・〇センチ、日記欄は、一頁縦書き二×二の四コマで、それぞれのコマに日付、曜日、行事が記され(これは太字で示した)、細字で三、四行程度の空欄となっている。

一、読みやすいよう句読点を附した。句読点の付け方には統一的な基準はない。原文にまれに句読点が付けられているが、必ずしも本稿のものとは一致しない。

一、合体字はカタカナ書きとした。

一、漢字は原則として常用漢字体を用いた。

一、不明文字・判読不能文字は、字数に従い、□□とする。字数が不明な場合は、「」を用いた。

一、本文は、削除や後補が錯綜しているが、後補したものを含めて翻字し、削除や訂正は、必要と判断したもののみ、削除記号を付して、

訂正前を示したり、注記をしたりした。

一、適宜【】または*を付して注記を補った。

一、原文の改行は、特に必要と認めた場合以外は追い込みとした。逆に読みやすいように、改行した部分もある。

一、本文の文字サイズは同一とした。小字注は()を加えて示した。特にメモの部分には、内容を捕捉することに重点を置き、縦書き・横書き・見せ消し・文字の大小・改行・空白など、必ずしも原文の体裁の通りではない。

一、プライバシーに関するところで削除したところがある。【】内に削除の旨だけ示した。

〔本文〕

一月一日〜二月二十八日 【無記入】

三月

一日 木曜

道中疲労ト感冒之気味ニテ、午前中在宅保養。午後出勤。帰途米田、桑原、宅和三人ヲ臨水亭ニ勧誘、晚餐ヲ共ニシタリ。

二日 金曜

午前ヨリ出勤。午后県庁出頭。帰松ノ披露ヲ為シ、且再任ノ藤本事務官ニ面会セリ。

三日 土曜

雨雪交下。春寒料【もと山偏に斗の字に誤る】峭タリ。此日、松平伯、日々軽快ノ吉報ニ接シ、足羽ト安藤諸賀両医士宛、祝電ヲ発シタリ。

四日 日曜 晴天

井川、堀尾二氏来訪。安藤女先生来訪。東京平情ヲ物語候。丸生退舎申来。学資雜費殘、代人へ相渡候。

五日 月曜 午前晴 后雨

松平伯輕快御(見舞)歎ノ為、蒲鉾十本、小包ニテ差出候。此日東京矢田、同北辰館主人宛、在沼津足羽、在広吉邨四氏へ郵書差出候。

六日 火曜 風雪

大黒、久米沢、二氏へ精算報告。芳子ト持田氏葉書差出ス。石橋へ近々出張之旨葉書差出ス。

七日 水曜 無風降雪

松江午後四時半発ニテ出張。宍道ニ投宿。

八日 木曜

大原郡南加茂渡部氏ニ至リ、吉太郎氏葬儀ヲ勤メ、遂ニ一泊。

九日 金曜 (旧二月十五日) 晴

渡部氏引続法会(七七)執行ニ付相勤、午後出發。木次石橋氏方ニ投宿。此夜、卒業生森山氏来訪ス。

十日 土曜 半晴

午前斐伊高等小学校參觀。了テ、三刀屋町ニ至リ、鍋【?】屋ニ投宿。昼飯ヲ喫シ、後三刀屋高等小学校參觀。木次ニ帰ル(森山 鶴島)。

十一日 日曜 朝来細雨

午前石橋氏同伴、横山耐雪ヲ日登出張所ニ訪問。雅談時ヲ移シ、昼飯ノ饗応ヲ受ケ、午後出發。大東町ニ至リ一泊。

十二日 月曜 稍晴

榎原氏方ニテ朝飯ノ饗応ヲ請ケ、了テ、大東高等視察。帰途、海潮高等視察シテ、帰松。登館後、四時過ナリキ。

十三日 火曜 【無記入】

十四日 水曜

矢田千代へ書状差出シタリ。

十五日 木曜 強風晴【一部記事削除】

松平伯容体報告会ニ臨ム。

十六日 金曜 晴【全記事削除】

十七日 土曜 晴風アリ

佐藤喜八郎氏訪問。午後竹原県会議長ヲ一文字屋ニ訪フ。教員ノ委嘱アリ。黒井、安藤女ヲ其学校ニ訪ヒ、対談ヲ為シタリ(安藤女先生来訪)。

十八日 日曜 快晴

午前在宿、后土肥、松浦、高橋、二丁目渡部、桑原ヲ訪問。餘【以下

中断】

十九日 月曜 晴【無記入】

二十日 火曜 晴 夕陰【全記事削除】

二十一日 水曜 春季皇靈祭

朝来微雨、沼津松平家宛輕快ノ祝電ヲ青柳ニ托ス、試験点調査ノ為メ出勤。橘量氏同意。調印方、鈴木氏へ依頼ス。

二十二日 木曜 陰 余寒

橘量氏ニ挨拶書ヲ出ス。

三月二十三日〜五月一日【無記入】

五月

二日 水曜

善繼七回忌法事営ム。

主人用雜費 〓 0.060 厘

主人用雜

五月三日〜二十三日 【無記入】

二十四日 木曜

修道会文藝部開会

二十五日 金曜 【無記入】

二十六日 土曜

本日、午後一時ヨリ、本県教育会惣会開催ノ筈。

おまき事本日出発上京。

二十七日 日曜

○本県教育惣会午前八時ヨリ

○端艇競争会開催

二十八日 月曜

朝、着京電報来ル。

二十九日 火曜 【無記入】

三十日 水曜

商業学校六週年記念会へ参席。

三十一日 木曜 【無記入】

六月

一日 金曜 晴天

飯島国之助ヨリ筆紙代0.120借 【×印で抹消】

二日 土曜

飯国筆紙代払済

六月三日〜十四日 【無記入】

六月十五日 金曜

弘道会松江支会協議会ヲ、此日午後四時市役所楼上ニテ開ク筈。

十六日 土曜 【無記入】

十七日 日曜

此日弘道会総会開設ノ筈。但正午ヨリ修道館ニ於テ。

十八日 月曜

午后三時市役所楼上ニテ、松江教育会評議員会開設ノ筈。

十九日 火曜 【無記入】

二十日 水曜

○永野武二郎餞別ノ為、臨水亭ニテ午餐ヲ供ス。山本市氏同伴ス。

○吉邨繁夫氏帰来ス。

二十一日 木曜 【無記入】

二十二日 金曜 【無記入】

二十三日 土曜

尾原亮吉氏亡妻埋骨式参席。了テ、望湖楼ニテ同氏招待ニ預ル。

二十四日 日曜 【無記入】

二十五日 月曜 【無記入】

二十六日 火曜

尾原氏ノ為メ、臨水亭ニテ晚餐会ヲ催ス。武次郎永野氏出発。英国行ノ途ニ上ル。

二十七日 水曜 【無記入】

二十八日 木曜

○吉邨婚儀挙行。

○牧瀬参事官講話。商業学校講堂午後三時ヨリ。

二十九日 金曜 【無記入】

三十日 土曜 【無記入】

七月

一日 日曜

午后六時ヨリ、勝部翁古稀会。松寄水亭。

七月二日ヨリ九月十四日【無記入】

九月

十五日 土曜

午前八時發汽船ニテ出發。郵船熊本丸ニ乗込ミ、午后八時、境出帆。

海上平穩。夜半ヨリ降雨。敦賀上陸ノ際、驟雨一陣。後漸次晴。

十六日 日曜 雨

午前十時敦賀着、上陸。十一時出發。一時過米原着。井筒屋支店ニテ

昼飯。二時五十分出發。五時名古屋着。牧氏方ニ投宿。向坂氏來訪。

十七日 月曜 雨

梟屬橋本氏案内ニテ、午前、高等工業学校并県立工業学校參觀。午后、

第一中学ト明倫中学并博物館參館。帰途、松原氏訪問。帰宿。

十八日 火曜 (旧八月一日) 稍晴

午前八時十三分名古屋發。午后四時過沼津着。車ヲ驅テ、伏牛仙洞世

古氏ニ投宿。

十九日 水曜 晴

午前五時卅分沼津發急行列車ニ便乘。同九時、新橋着。啓次郎出迎。

電車ニテ新宿角筈謙一郎寓所ニ投宿。

二十日 木曜 晴

午前松平伯訪問。用談ヲ為シ、午餐ノ饗応ニ預リ、知事ヲ東京俱樂部

ニ訪モ、不会。帰途、五二会ヲ一覽。了テ武部繁氏訪問。帰宿。

二十一日 金曜 雨

午前知事ヲ大森ノ邸ニ訪問。帰途、品川ニテ午餐。夫ヨリ文部省ニ至

リ、木邨浅井両氏ニ面会。黄昏、木村氏ト松浦氏ヲ望遠館ニ訪問。鼎坐一酌、久闊ヲ叙ス。

二十二日 土曜 雨

午前八時、知事ヲ新橋ニ見送り、本間松浦ニモ告別。帰途、高等工業

学校參觀。浅草ニテ昼飯。夫ヨリ、服部、松の館ニ岡氏ヲ訪。武部方

ニテ夕餐。帰宿。

二十三日 日曜 朝曇後降雨

午后、謙一郎夫婦ト啓次郎同伴、散歩。神田淡路町江木ニテ撮影前、

神田鰻屋神田川楼ニテ晚餐。後、神田橋詰和強楽堂ニテ聴樂。帰宿。

二十四日 月曜 秋季皇靈祭 快晴

終日在宿。午后啓次郎ト同伴。十二社公園ヲ散歩。

二十五日 火曜 半晴

午前七時十五分新宿發ニテ、仙台ニ行ク。五時着。倉敷福太郎氏寓所

ニ投宿。夜來雨アリ。冷氣ヲ覺ユ。

二十六日 水曜 午前雨

工業学校、東北中学、第一中学校ヲ參觀ス。了テ散歩。滝川氏訪問。

歓迎小酌ヲ催サル。

二十七日 木曜

午前仙大【ママ】發。塩竈ニ至リ、舟ヲ舩シ、松島ヲ巡覽シテ、午後

六時帰仙ス。

二十八日 金曜

午前七時發、帰京。

九月二十九日ヨリ十月四日【無記入】

五日 金曜 晴

午前八時、東京發。午後五時、名古屋着。牧氏方ニ投宿ス。

六日 土曜 晴

午前八時、名古屋発。二時卅七分大坂着。源次郎方ニ投宿。

十月七日〜十一月三十一日 【無記入】

【日付部分(い)まで】

【以下、メモ用紙部分書き込み】

六道高等

四年 18

斐伊高等学校

四年 = 31男30

三年

農 = 37

高等教員 = 5

岡田道太郎

安井ミツ

松江

坂田ハル

実

宮川亥之助

宮本次郎

森山多一郎

若槻エリ

農

錦織真一 【?】

土屋貫一

板持健市

三刀屋高等 惣計137 = 男 = 103

女 = 34

一年 = 38 - 26

女12

前年比較 - 9

二年 45 - 35

女10

+ 16

大東高等小学校

四年 = 42. 女10. 二年 = 48. 女10.

三年 = 38. 女8. 一年 = 40. 女15.

海潮高小学校

= 6 実1 2 - 20

実二年 = 5. 一年 16

実二年 8 実四年 = 8 男五七

○訓練法撮要上下 著者 佐々木吉三郎 人格論ヲ見ルベシ

名古屋【見開き右頁上部。他に記載なし】

東京【見開き左頁上部。他に記載なし】

工業学校 経費 = 7,815.143

学科 金工 = 1308.

木刻 = 662.

原料費

生徒製作収入 350

現金 147 内 金 = 78

木 = 68

50. - 170

25 - 5倍

25 - 3倍

認可

台 私東北中学校

定員五百人 現員 = 479

職員 = 20

望校【?】 = 12

学内 = 11

県費補助 = 2000 + 10120

経費惣計 = 13054

仙 県立高等女学校

市立東花女学校

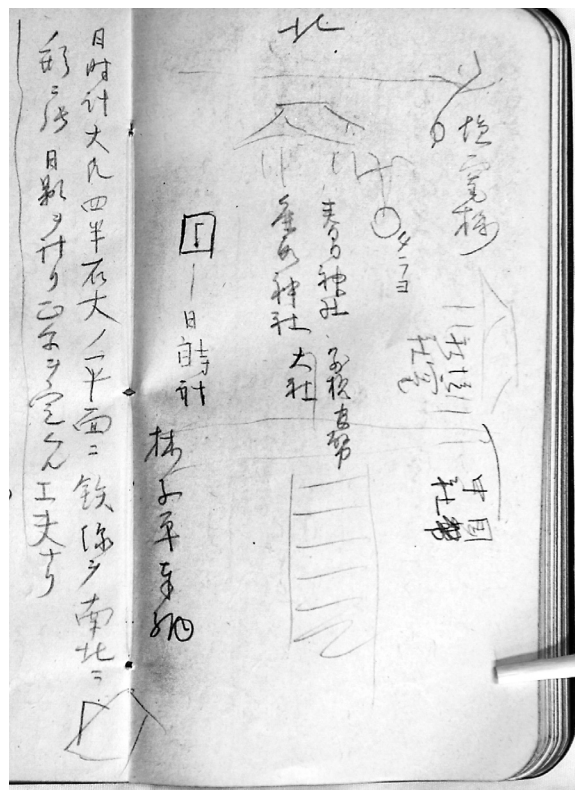
私立東北学院普通部

第一中学校

私立松操女学校

東北女職業学校

【塩竈神社境内図】



塩竈様

北 ○タラヨ【タラヨウ】

社塩 中国
社塩 社幣

春日神社 別格官幣

鹿取神社 大社

日時計 林子平奉納

日時計、大凡四半石大ノ平面ニ、鉄線ヲ南北ニ「」【図参照】ノ形

二張、日影ヲ計リ、正午ヲ定ムル工夫ナリ。

松嶋 眺望最好ノ処ヲ雁金森トス

○御島ニ至ル一橋アリ。渡月橋ト称ス。島ハ瑞巖寺ノ所有ニシテ、目下豪家遠藤某地所ヲ借用シテ、別荘ト為ス。雄島トモ書ス。医国殿トスル葉師堂アリ。葉師ノ大像アリ。字【慈カ】覚大師彫刻ナリト云。千七十年前ノ作ナリト云。堂守ノ住所ヲ松吟庵ト云。各種碑中左ノ語アリ。

天下有山水。各擅一方美。衆美歸松洲天下帶山水。 仙台僧家 南

山道人

芭蕉翁碑

朝よさを誰まつしませ片心

觀瀾亭内屏風盤【磐の誤り】溪詩

遊松島ノ其一

袁【原文は遠】浦潮来帆影飛 霞横離島夕陽微
幾群白鷺潔於雪 粧点青松待我帰

其二

江山縹渺入仙寰 魂遶青螺萬点間
酒榼茶籃俱一席 秋航機【原文は舩】在蓼花湾

其三

風帆近掠岸辺松 遙見群巒走如【原文は若】龍
幾処湾崎巧交代 前洲纔綻後洲縫

其四

補綴皇媯五色石 萬松留在不周山

只疑地飲天崩後 關此羣仙游戲寰

其五

曉来白雨入船多 奇景使人呼若何
潑準滄雲包月去 餘光落海碎金波

其六

半夜津樓酒未消 雄洲西畔試逍遙
織雲不動天心月 人影依微【原文は稀】度島橋

七

月搖松影上吟衣 石径高低步々移
探盡雲居坐禪窟 挑灯立読一山碑

其八

一島纔過一島長 双橋駕処履秋霜
瞳瞳日上金花外 映出松間大堂【五大堂の誤り。原文同じ】

九

鱗紋竹柵繞巖扉 渚館高臨觀月磯
昨日小君停彩鷁 戲沙鳧雁有光暉

十

海門中断望東灘 依約天橋駕碧湾
十里行松青一带 白沙尽処是円山

十一

半壁天開峽勢孤 群螺点綴小仙区
新毫誰借倪黄手 画做扇頭平遠図

十二

蘇公赤壁遊前後 七月殘炎十月寒
何似高秋三五夜 泛舟松島月中看

【この屏風は現在宮城県松島町松島博物館（観瀾亭に併設）に所蔵されている。松島町教育委員会米城百合子氏のご教示により、難読の部分
が解決した。感謝申し上げます。なお、これらの詩は、江戸時代後期か
ら明治にかけて活躍した漢学者、大槻磐溪の作品で、その著『塩松紀
遊』に収められている】

宮城県農況

第二回報告 073作 第一回報告071減 165

岩手、福島両県農況

大凡ノ180作

欲為刻文策【?】寸功、下帷寄跡鉄【?】東、

一時蹉跌 光命【?】、

由来世事如兜戲 名説窮通怨碧翁

人生窮達君休問 萬事由来是塞翁

右和半農半仙兄見寄韵却呈

【以下明治四十年漢詩】

丁未二月 東湖養生館雜詠二首

詩 其一 中 湧且

臨湖築得養生樓、好有靈泉纒檻流

人囊此処傳【?】足【?】

浴後呼盃々後睡 淹留數日儘優遊

イキ 儂遊身謝在仙洲

自適好忘憂

其二 徒

淹留數日儘優遊、起臥無時人在樓、

好

斯境不唯山水美、靈湯一浴良消憂

四十年二月 丁未二月東郷養生館雜詠二首

詩 其一

得閑來宿養生樓 起臥無時儘自由

浴後呼杯々後睡 波光鬢影夢悠々

其二

風□□□ 剩

此郷風物絶囂塵 沈有温泉最適身

鶴湖勝景

春服未成冠者少 乘閑独作浴沂人

其三【以下中断カ】

【以下明治四十二年松島再訪のメモ】

四十二年五月十二日松島再遊備忘

松島瑞巖円福禪寺碑寺ノ中門前ニ在リ、右大臣

従一位大勲位岩倉具視公篆額。宮内大輔従四位勲

四等秋孫七郎撰文、内閣大書記官従五位勲五等

金井之恭書 明治十五年十一月

按旧記、此寺旧称松島寺、承和中天台宗僧慈覚所創。歴四百餘年、鎌

倉執権北条時頼逐台徒、使禪僧法永住持、更名円福寺、為臨濟開祖、又三百餘年仙台藩主伊達政宗拓其境而改造之、冒以瑞巖二字云、……中略

政宗之改造此寺、特飾一室、極其美麗、人不知其故、遂莫敢居者、至此是奉以為御坐、云々

備考明治九年六月車駕東北巡幸ノ際其一室ヲ

御坐ニ当ツト云

【メモ部分は以下白紙】

【手帳付録住所録部分】

◎宿所録

- 四谷区元鯨ヶ橋町五八 松平伯
- 牛込加賀町二丁目二一 松平直平君
- 小石川林町三〇、 梅 謙次郎
- 小石川表町一〇九 清水彦五郎
- 牛込区矢来町八 若槻礼次郎
- 豊多摩郡新宿魚笥七六一 謙一郎寓所番地
- 麹町区中六番町一〇、石原方 啓次郎同上
- 豊多摩郡代々幡邸代々木一八五 木邨峯之助
- 下谷区西町三十三 服部タツ
- 麹町日比谷公園前有楽町二丁目中山邸内 武部繁之助
- 本郷森川町一番松の館 岡 正雄
- 赤坂区丹後町一番地安藤邸内 松崎故一郎
- 新宿角筈 高橋友太郎兄弟
- 赤坂区台町七七、 井原 昂

- 麹町平川【河カ】町五ノ三七
- 牛込神楽坂二ノ二〇
- 本庄【所カ】区小梅通町一八
- 牛込柳町二八

- 仙台市卷ノ袋町廿四
- 麻布龍土町七二、

- 麹町区飯田町富士見町六丁目八番
- 新宿柏木一二八、

- 本郷上駒込妙義坂三三〇、

【裏表紙見開きに附されたメモ】

- 上野仙台 〓 4.926
- 白河海面ヨリノ高サ 〓 1167.呎(フィート)

Change

T

□町 五八

- 浅井郁太郎
- 高橋龍雄
- 羽左田 義
- 遠藤武次郎
- 河上 栄
- 恒松隆慶
- 倉敷福太郎
- 山本邦之助
- 佐川春水
- 鹿田熊八
- 石原三郎
- 堀 正太郎

【手帳付録会計簿部分 1】

月日	摘要	入金	出金
三月七日	松江宍道舟賃		23
〃	手拭一		050
	五月主人雑控		
二日			060
三日			060
九日	髪剃代		030
十日	入浴賃		040
〃	皆員列車賃		100
	小計		290
十四日	入浴髪剃代		080
十六日	同上		030
廿日	同上		080
廿四	同上		080
廿九	斬髪		070
31			050
	計		390
	通計		680

【手帳付録会計簿部分 2】

九月拾五日出京ノ際

月日	摘要	入金	出金
	持出	141,350	
9 15	境迄舟賃		265
〃	髪剃賃		040
〃	境宿払		460
〃	同茶代女中共		700
〃	敦賀迄舟賃		6680
〃	按摩賃		100
〃	西洋手拭		100
9 16	敦賀ニテ車賃		130
〃	同地茶代并千代へ		280
〃	新橋迄汽車賃		6620
〃	弁当代米原ニテ茶代共		500
〃	米原下女ヨシ		100
〃	袱紗代		1400
〃	名古屋車代		980
〃	杖 下女		500
	小計		

【手帳付録会計簿部分 3】

月日	摘要	入金	出金
9 18	車中弁当代		0.280
〃	沼津宿払		1.850
〃	茶代		0.500
〃	女中三人		0.600
9 19	東京電報		0.200
〃	急行列車券		0.600
〃	車中弁当代		0.400
〃	松江電報		0.200
〃	電車賃		0.090
	車賃		0.090
	×		
9 22	岡君二渡		17.500
〃 23	啓次郎本月分		15.000
〃	写真代并昼食代		6.000
	御買物計		10.000

【手帳付録会計簿部分 4】

月日	摘要	入金	出金
9 24	深雪殿渡		10000
	仙台往來賃		9000
	独身写真場		2600
9 30	深雪殿渡		15000

〔付記〕

本稿は、

科研費 基盤研究(C) 研究課題／領域番号19K00296

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究 (期間 二〇一九～二〇二一年度 研究代

表者 要木純一)

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究(課題番号 一九一三 期間 二〇一九～

二〇二一年度 研究代表者 要木純一)

による成果の一部である。

Reprint ; Diary of Watanabe Kanichirou: 1906

Research Project on Works of Watanabe Kanichirou

[Abstract]

Watanabe Kanichirou (1854 – 1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here we transcribe his diary written on 1906. Through this diary we can perceive how he as the principal of Shudokan school devoted himself to develop his school and made relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats. This diary also recorded Kanichirou's works of Kanshi (Chinese-style poetry).

Keywords: Watanabe Kanichirou, education, Meiji era, Kanshi